寄稿

人口減少社会と地方都市の活力再生

株式会社さくら都市綜合研究所
主席研究員 清水 秀幸

17 都市の景観を考える

県教育委員会が2018年度から5年間の次期スポーツ推進計画の原案に盛り込んだ、スポーツを「ささえる」習慣の育成について考えていきたい。

この「ささえる」という行為や言語は今に始まったものではない。長野市民にとって、それは1998年長野五輪・パラリンピックで既にしっかりと根づき、その証（あかし）に今年で20回目を数える長野マラソンも約4千人のボランティアに支えられ開催される。

このボランティアの献身的行為は、参加する出場者の高評価によって全国屈指の市民マラソンの地位を確固たるものにしている。

その発端となったのは、長野五輪・パラリンピックで、長野市内の小中学校などが、応援する国や地域を決めて交流する「一校一国交流活動（一校一国運動）」である。

相手国の言語を学び、選手らと交流する中で、異文化を理解するとともに、我が国の文化を発信し、ともに国際交流を深める大きな礎（いしずえ）となった。

そしてその運動は、今や世界の子どもたちに引き継がれようとしている。その運動を通じて国境という壁を越えた当時の子どもたちも、今や社会を支える立派な青年に成長し、筆者も含むひと昔前の大人とは尺度の違う世界観の中で、まちを支えようとしている。

それほどまでに、スポーツの享受する文化は偉大なものといえるのである。この原稿が読者の目にふれる頃には、韓国・平昌（ピョンチャン）で開催された冬季五輪も閉幕を迎えているはずである。

水上に舞い、雪上に飛翔したアスリートは極めて美しく、その絵画を映し出すテレビの前では、多くの視聴者の一喜一憂が透けて見える。

しかし、今回も本来の近代オリンピックアードの理念とは異にする「政治の介在」が認められたことは痛快の極みである。

五輪憲章には、「オリンピックは、あくまで個人・団体を問わず参加するアスリート同士の競争であり、国家間の競争ではない」と定められている。

この理念は、ナチスドイツのヒトラーが国家発揚に利用した1936年のベルリン五輪の猛省の上に謳（うた）われたものである。

スポーツの素晴らしさとは、目の前で己の実感を通じて、人間の肉体が奇跡を起こす瞬間を他者と共有することの喜びで、それが醍醐味である。

（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市綜合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長